

映画「不撓不屈」を観て

硬派のドキュメント「不撓不屈」を観た。経済小説の第一人者、高杉良自身が惚れ込んだ、実在の人物「税理士・飯塚毅」の人物像と乾坤一擲の正念場を描いた小説の映画化である。熱血漢の主人公飯塚毅が強い正義感のあまり、国家権力と対決して国税当局から不条理な怒りを買ひ、家族や同僚、そして恩師と顧客まで窮地に追い詰められる。だが、最後には信念と正義が勝って大団円の内に、社会派ストーリーは幕を降ろす。

しかし、見終わってなぜか釈然としない気もする。終始一貫画面いっぱいに国家権力の横暴と、陰湿で理不尽な公権力の濫用を見せつけられたせいである。社会通念から推して、何ゆえ国は真っ当な納税者や、遵法精神に則っている税理士に対して、かくも高圧的な権力行使が出来るのか。結局、公権力に立ち向かう正義漢が現れなければ、この世は闇ということになりかねない。飯塚事件が契機となり、その後の法改正により税理士は、検察や税務当局等の国家権力の縛りから逃れ、遵法精神に基づく独自の税法解釈による節税指導が可能になった。だが、現行は果たして飯塚が身を挺して訴えた、税の本質と立法精神が活かされているだろうか。よもや、「第二の飯塚毅」登場を促すような予兆はないだろうか。

愛情の温もりが感じられる飯塚家に、ふと半世紀前に観た映画「少年期」をダブらせてみた。ホテルの一室でそっと手渡した手紙に両親への愛情を表した息子と、疎開先で深夜「少年期」の息子に「いつ死ぬか分からない今だからこそ、いつ死んでも悔いのないように本を読んでおくのだ」と信念をもって生きることを諭した読書家の父。ともに追い詰められた環境下であってなお、家族の強い絆と毅然として生きる姿が暗示される場面である。

平日のせいもあってか、観客のほとんどは男女の別なく中高年者だった。世情混沌とした現代だからこそ、もっと多くの若い人たちに観てもらいたい。改めて「正義」の意を考えさせてくれる力作である。